

# 平和への願い 強く

## 「多喜二祭」市民劇出演の3世代語る

# 小樽後志

## 選挙の重要性知った

湊夏帆さん(21)  
若者役、保育士

私は「多喜二祭」や箕輪登さんの名前も、市民劇に出演することになるまで知らなかった。選挙の重要性を知ったのは、1年生くらいで、ニュースの記憶もありません。劇中では護憲を訴えるためデモをする若者を演じました。「選挙に行こうよ」と声を張り上げてセリフを言っていました。日頃の友達との会話では絶対に出ない言葉でした。今も、各党が何を言いたいのかは正直分かりませんが、憲法改正についても絶対良くないのかどうでないのかまだ自分の中で答えが出ていません。劇の脚本には「専守防衛」や「安保法制」など分からない言葉がたくさん出てきました。劇の稽古を重ねる中で、政治が分からないまままだと間違った選択をしてしまうのではと危機感を覚えるようになりました。政治は分からない、で終わらせるのではなく、分かるよ



市民劇の稽古で若者役を演じる湊夏帆さん(右から2人目)

小樽ゆかりのプロレタリア作家、小林多喜二(1903〜33年)の没後85年を記念し、「小樽多喜二祭」で上演された市民劇(2月18日、小樽市民センター・マリンホール)に出演した小樽市民が、戦争や平和についてそれぞれの思いを深めている。12歳、21歳、70歳の3人に語ってもらった。(徳留弥生)



「小樽多喜二祭」の市民劇に出演し、悪童役を演じる遠藤悠さん(左の長身の子) 2月18日、小樽市民センター・マリンホール

## 反戦の思い発信する

遠藤悠さん(12)  
悪童役、小学6年生

戦中に在日朝鮮人の女の子をいじめめる「悪童役」を演じました。演じたからこそ、民族の違いでいじめが起ってしまうということ、自分の身に置き換えて考えるようになりました。今は平和になったから中国、韓国、日本の人々がお互いの国を行き来できる。そういう関係を崩さないようにしたい。学校では、朝鮮人への差別や、戦前に朝鮮半島の子どもたちが日本語の授業を受けた事実は社会の時間に勉強しました。けれど、授業だけでは戦争の歴史にはあまり関心を持っていませんでした。劇に出ることになったから脚本を読むうちに、「戦争」が人ごとでなくなりました。小林多喜二の小説「蟹工船」も読みました。人が機械のように扱われ、会社が

小樽多喜二祭 小樽で育ち、特別高等警察の拷問で29歳で亡くなった小林多喜二の命日の2月20日を中心に、1988年から続く追悼行事。市民劇は、ほぼ毎年行われ、今年には小樽出身の元自民党衆議院議員で、郵政相を務めた故・箕輪登さんが、イラクへの自衛隊派遣に反対して国を訴えた姿を描く「この日本がいつまでも平和であってほしい」を上演。箕輪さんや悪童役を20人の市民らが演じた。

うにこれから新聞やテレビを使って何が正しいのか自分の言葉で伝えるようにしたいと思っています。

平和や選挙については、学生の頃から自分なりに考える機会がありました。私は名寄市立大学短期大学部の児童学科を卒業しました。短大では保育と自然、平和をテーマに学びました。授業で見た沖縄の地上戦のビデオで、米軍に捕まった子どもの映像を見ました。「この子どもたちの飯はどうなるんだろう」と、保育と平和との関係について深く考えました。ゼミの卒業旅行では実際に沖縄に行き、基地で座り込みをしている人とも話しました。その中の1人の方から「選挙に行かなきゃだめだよ」と言われたことがとても印象に残っています。沖縄に行く前の2016年7月の参院選は1票の大切さが分からず投票に行きませんでした。今では選挙が国に自分の意志を伝える大事な手段だと思っています。